

T E T S U O O W A D A

小和田哲男

戦

国

の

城

戊辰
国の城

常州大学図書館
蔵書章

小和田
哲男

学研
M文庫

せんごく しろ
戦国の城

おわ だてつ お
小和田哲男

学研M文庫

2013年9月24日 初版発行

●
発行人——協谷典利

発行所——株式会社 学研パブリッシング

〒141-8412 東京都品川区西五反田2-11-8

発売元——株式会社 学研マーケティング

〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

© Tetsuo Owada 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは——編集部直通 Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——

販売部直通 Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8

学研お客様センター『戦国の城』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。

Tel 03-6431-1002 (学研お客様センター)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター TEL 03-3401-2382

<http://www.jrrc.or.jp> E-mail: jrrc_info@jrrc.or.jp

Ⓔ 〈日本複製権センター委託出版物〉

戦国の城◎目次

はじめに——3

序章 城とは何か——21

「城」の字の成りたちと読み方

土を盛る

「き」と「しろ」

古代の城

城の起源は高地性集落と環濠集落か

神籠石と朝鮮式山城

天智天皇期の築城と中国式の城

東北の城柵

中世の城

鎌倉武士の館

南北朝期の城

室町期の守護館と守護町

戦国争乱の舞台となつた戦国の城

——高天神城の武田・徳川の攻防を例に——

今川の城から徳川の城へ

武田信玄・勝頼に攻められた高天神城
武田に取られた城を奪回する徳川家康

第一章

戦国の城とはどのようなものか——67

平時の居館と戦時の詰の城

武田氏の躑躅ヶ崎館と要害山城

館と城のちがいはあるのか

本城と支城・又支城

意外に多かった戦国の城

戦国大名の家臣団編成とのかかわり

土豪はどのように城に集められたか

境目の城と繋ぎの城

境目防備の城

繋ぎの城の役割

烽火台と烽火網

第二章

戦国の城の築城法

— 103 —

戦国大名家でちがう築城術

曲輪配置の四類型

『甲陽軍鑑』の記す武田流築城術

縄張と築城名人

地選・地取そして経始

築城に携わった人びと

城を守る呪術

人柱伝説と呪術

城にあらわれた鬼門除け

第三章

戦国の城の普請と作事

— 135 —

堀と土塁で囲まれた曲輪

戦国の城の部位と名称

空堀と水堀

土塁と土塁上の防御施設

築城者が力を入れた城の出入口部分

虎口の造り方

馬出と枡形

石積から石垣へ

石切り出しとその運搬

石垣の積み方いろいろ

石垣の刻印は何のためか

作事の実際

木材はどう確保されたのか

城内の建築物のいろいろ

築城者が力を入れた城門

第四章

戦国の城はどう機能したか——攻城戦と籠城戦——

185

山城・平山城・平城それぞれの利点

江戸時代の軍学者のいう「堅固三段」とは

意外と攻め落とされにくい平城

城攻めの方法いろいろ

籠城戦で敵を撃退した城

上杉謙信・武田信玄を撃退した小田原城

尼子晴久軍を撃退した安芸郡山城

籠城戦に不可欠な兵糧と水

籠城に備えて用意周到

水の手の確保

付城を築いての城攻め

信長は小谷城攻めに三年をかけた

秀吉が三木城攻めで築いた付城市群

第五章

戦国城下町の発展と惣構

—— 217

常備軍団成立以前の城下町とは

武士の城下町集住は兵農分離後

商人と職人の集住

城下町を防備の一環に位置づける

屈曲の多い街路

城下の外れに寺町を配置

城下町を包含した惣構の構築

惣構とは

代表的な小田原城の大外郭

第六章

戦国の城から近世の城へ

—— 237

安土城と大坂城の出現

織田信長の独創性と城

安土城天主の斬新さ

近世城郭のスタイルを作った大坂城

天守の役割とは何か

戦国の城の終焉

兵農分離で役目を終えた戦国の城

信長・秀吉の城割

秀吉による居城の強制移転

おわりに——262

イラストレーション・安久津和巳

写真提供・GIM 斯波 進 小和田哲男

戦国の城

小和田 哲男

学研M文庫

はじめに

江戸時代のはじめ、元和元年（一六一五）^{げんな}閏六月十三日^{うるう}、幕府は諸大名に、自分が居城する城以外の破却を命じた。いわゆる「元和一国一城令」である。このとき、若干の例外はあるが、それぞれの大名が領内にいくつも持っていた支城が廃城になっている。

ただ、意外なことに、破却とか廃城という言葉とは裏腹に、城そのものは結構残ったのである。もちろん、門や櫓^{やぐら}などの建造物は壊されたり、あるいは放置されて自然に朽ち果ててなくなっているが、堀や土塁、石垣などはほとんどそのままの形で残って今日に伝えられているものが少なくない。私もその選定

委員に加わった財団法人日本城郭協会の「日本一〇〇名城」に、近世の城以上に戦国の城がリスト・アップされたのはそのためである。

どうして戦国の城が残ったかといえ、一つには、諸大名にとって、幕府の命令なので破却しなければならないが、徹底的には壊したくないという思いがあったからである。支城破却のことを「城割」とか「破城」というが、石垣の一部だけを申しわけ程度に破却したり、極端な例では、毛利氏の岩国城のように、表から見えるところだけ破却しているような城もあった。再度使おうという意思があったかどうかは別として、積極的に壊そうという思いがなかったことはまちがいない。

二つ目に、その後、廃城になった城跡がいわゆる「お留め山」となって、庶民の立ち入りを拒んでいたことも理由としてあげられる。諸大名としても、非常時にはそこを要害として使おうという意図があったからである。開発の手が入らなかったことが幸いした。

また、諸大名が本拠の城として残したところが、藩の政治・経済の中心ということで、平地にあったのに対し、戦国の城である支城はどちらかといえば山

間部の山城ないし平山城で、そのままの形で残ったというのも理由にあげられる。

こうして残った戦国の城ではあるが、近現代に入ってから、残念ながらもなり壊されてしまった。学校などの公共施設、宅地造成、道路、ゴルフ場などでつぶされてしまった城は数えきれない。私も、その都度、保存運動の旗振り役をしてきたが、保存が成功し、国指定の史跡までもっていったものが何力所かある反面、力及ばず壊されてしまった城も多い。

しかし、ようやく最近、戦国の城を見直す動きがでてきた。保存をよびかけるとき、そこに住んでいる人びとの応援の声が大きくなってきたことを肌で感じている。

近世の城のような天守や櫓などのあるものところが、戦国の城はどうしても地味である。地味ではあるが戦国の城は奥深く、文句なくおもしろい。戦国の城の魅力を描きだしたいと考えている。

